

2025/11/09

説教題：教派の全体像

聖書箇所：エペソ人への手紙 4 章 1-7 節, 11-13 節；ローマ人への手紙 15 章 5-7 節

聖書朗読 1: エペソ人への手紙 4:1-7, 11-13

¹さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。²謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、³平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

⁴からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。⁶すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。⁷しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。．．．

¹¹こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。¹²それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、¹³ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するためです。

聖書朗読 2: ローマ人への手紙 15:5-7

⁵どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。⁶それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。⁷こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。

おはようございます、皆さん。また皆さんにお会いできて嬉しいです。今日は、私の説教ペテロの手紙 第一 シリーズを少しお休みして、長い間考えてきたテーマについての一回限りの説教を行います。このテーマについては、OIC の兄弟姉妹の何人かにお話ししており、皆さんから共有するように励まされました。今年の初めに、私は大阪インターナショナル教会（OIC）のプロテスタント的、福音的、かつ超教派な教会としてのアイデンティティというテーマで、三部構成の説教シリーズを行ったことを覚えているかもしれませんが。そこでは、プロテスタントであることの意味、福音派であることの意味、そして私たち OIC がさまざまな教派から集まっているにもかかわらず、一緒に交わりを持ち、イエス・キリストを主であり救い主として認めながら共に弟子となることを目指していることについて説明しました。ここにいる私の兄弟姉妹の中には、キリスト教内の様々な教派の問題をもっとよく理解したいと話してくれた人が数人います。確かに、これは混乱する状況です。なぜこんなに多くの教派があるのでしょうか？なぜキリスト教にはこれほど多くの異なる表現があるのでしょうか？私たちが聖書の朗読で読んだ“信仰の一致”はどうなってしまったのでしょうか？今日は、皆さんにこのすべてを説明するという大きな挑戦に取り組もうと思います。まあ、すべてを説明するわけではありませんが、私は「教派の全体像」と呼ぶものの大まかなイメージをお伝えしたいと思います。実際、それが今日の私のメッセージのタイトルです：「教派の全体像」。これを説明するために、私は歴史神学にさかのぼり、初期キリスト教の数世紀にわたる重要な神学的議論を説明し、16 世紀のプロテスタント改革に進み、そして現代の状況で締めくくるつもりです。そして、これを約 45 分で行う予定です。

今日のメッセージが歴史の講義のように聞こえるのは望んでいません。それどころか、これは私の心からの訴えであり、キリストの兄弟姉妹たちが教派の違いを超えて愛と受け入れ、寛容さを示すことを願うものです。数分前に聖書朗読で聞いたばかりのいくつかの節をもう一度読み上げさせてください。ローマ 15:5-7 – 「⁵どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてください。⁶それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。⁷こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」ここで使徒パウロは、神がエペソのクリスチャンたちに「互いに同じ思いを持つ」ように、また「声を合わせて私たちの主イエス・キリストの神であり父をあがめることができる」ように、そして「キリストが受け入れたように互いに受け入れる」ことができるよう祈っています。私も現在の時点で、私のクリスチャンの兄弟姉妹たちがこれを達成できることを祈ります。パウロが言うように、これは「忍耐と励ましを与えるのは神」であることに注意してください。キリスト教生活のすべてにおいて、神が聖霊を通して、私たちに望まれることを行い、神が従うように命じた戒めに従う力を与えてくださいます。ここでパウロが祈る一致は、私たちが勤勉かつ規律を持って、神が私たちのうちで働かれることを許すならば実現可能です。

私が大阪インターナショナルチャーチの一員であること（33 年間）以来、日曜礼拝のプログラムの表紙には、常にこの聖書の一節が引用されています：エペソ 2:19 – 「こうい
うわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民で
あり、神の家族なのです。」私は、この聖句は、さまざまな国、文化、教派のキリスト教の兄弟姉妹で構成される OIC フェローシップに非常に適切に選ばれたものだと思います。このフェローシップの中で、私たちは見知らぬ者や外国人ではなく、むしろ兄弟姉妹であり、神の御国の同胞であり、神の家の一員です。そして、19 節の後に続く聖句を読むと、それらが示唆に富んでいることに気づきます。

エペソ人への手紙 2:19-22 を読みましょう – 「¹⁹こういうわけで、あなたがたは、もはや他
国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。²⁰あなた

がたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。²¹この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、²²このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」

キリスト教会は神の家であり、主であり救い主であるイエス・キリストに信仰を置いたすべての男性と女性で成り立っています。この神の家は使徒と預言者の基礎の上に築かれており、つまり、この家は新約聖書において使徒と預言者によって伝えられた福音のメッセージの上に築かれています。このメッセージは神によって啓示され、聖霊の力によって推進される伝道活動と共に広められます。そして、この基礎の礎石はイエス・キリストご自身です。もし私たちがキリストを中心にしなければ、道を誤り、神への正しい道から逸れ

てしまいます。21 節と 22 節では、私たち教会の会員は建物の石として描かれており、一つ一つ、ひとりひとりのキリスト者の改宗者として、世代を超えて、この建物を組み立てながら、イエスが戻られるまで教会は築き続けられるのです。

エペソ人への手紙 4 章の 4-7 節に行きましょう - 「⁴からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。⁵主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。⁶すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。⁷しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。ここで述べられている一致に注目してください：一つの主、一つの信仰、一つの洗礼、一つの神であり父である方。

では、この一致に何が起こったのでしょうか？なぜこれほど多くの教派があるのでしょうか？教義の問題に関して、なぜこれほど多くの意見の相違があるのでしょうか？

いくつか簡単な所感を共有させてください。これが私の主な主張です：時には、新しい宗派が誕生するのは、重要でありながら軽視されていた聖書の原則が再発見され、再び強調されるからです。今日のメッセージの後半で、私はそのいくつかの例を示します。

第二の論点は次の通りです。宗派はしばしば文化のようなものだと私には思えます—特定の思考の枠組みが人々の集団に深く根付いており、異なる思考の枠組みを持つ人々と交流するのが難しい場合があります。ほとんどの宗派はイエス・キリストを確固たる基盤として持っていますが、信仰を表現する方法はそれぞれ異なる方向に進化してきました。私の目には、異なるキリスト教グループが取ってきたこれらの分岐した道は、異なる文化、異なる考え方、異なる強調点のように見えます。そして、他の宗派の兄弟姉妹と交流するためには、ある程度の寛容さと異文化間のコミュニケーションが必要です。

私の三つ目の主張は、否定的な主張です。特定の宗派の中で、間違った考えや間違った実践が当たり前になり、自己満足と相まって、霊的に死んだ体系が生じることがあります。もしわたたちが規律を守り続けず、次の世代に規律の実践を伝えなければ、どのキリスト教グループもこの道をたどることになりかねません。そして、前の説教で述べたキリスト教生活の三大敵、すなわち世、肉、悪魔について覚えておいてください。これら三つはすべて、教会の有効性を失わせる働きをしてきました。

そしてそれは私の主要な主張に戻ることであります：時には、新しい宗派が存在するのは、重要ですが無視されてきた聖書の原則が再発見され、再び強調されるからです。生き生きとした、活気あるキリスト教の信仰の完全な表現を望むクリスチャンは、道を見失った古く停滞した集団に背を向けなければならないことが多いのです。

今日のメッセージでは、私の否定的な主張や第二の主張について多くは語りませんが、時を経ていくつかの重要で基本的な教義に置かれてきた重要性の歴史についてお話しします。

もう一度ローマ 15:5 を見させてください – 「⁵どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。」私たちは「同じ思い」である必要がありますが、その心は、イエスと使徒たちの教えに基づく健全な聖書的神学に従って、「キリスト・イエスにふさわしい」必要があります。

そしてクリスチャンの教会を描写しているエペソ 2:20-21 をもう一度見ましょう。「²⁰あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。²¹この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、」イエス・キリストは真の教会の礎石です。もしイエスが忘れられたり、イエスに関する考えが歪められたりすると、私たちは真のキリスト教を持っていません。

イエス・キリストを私たちの礎石とし、使徒や預言者の教えを土台として、私は皆さんに一つの絵を描こうと思います——それは簡単で、おそらくあまりにも単純化しすぎたものかもしれません——私が『基本的な正統派キリスト教神学』と呼ぶものの絵です。画面に一つの箱を示し、それに『正統派キリスト教神学』とラベルを付けています。注目してほしいのは、私の箱を囲む赤い線がいくつかあることです。これらは私の確固たる赤線であり、箱の中は正統派キリスト教であり、箱の外は異端と呼ばれるものです。後で、この箱の中に存在するさまざまな宗派について説明します——彼らはいくつかの教義について異なる意見を持っていますが、すべてイエス・キリストと、私たちのために提供された救いの道という基本的な真理を受け入れています。また、この箱の外にいる、イエス・キリストのメッセージを著しく誤って理解しているいくつかのグループについても説明するつもりです。

「オーソドックス」という言葉を定義させてください。これは「オルトス (orthos)」と「ドクサ (doxa)」という言葉から来ています。オルトスは「まっすぐ」あるいは「正しい (正確な)」を意味します。ドクサは「教え」や「教義」を意味します。オーソドックスは「正しい」または「まっすぐな教義」という意味です。ここで私が述べようとしているのは、キリストとキリスト教の教えに関する正しい、またはまっすぐな教義についてです。

基本的な正統派キリスト教神学の例にはどのようなものがありますか？導入としていくつかの聖句を引用させてください。死とパウロは、テモテへの手紙 第一 1 章 15 節前半でこう述べています – 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。…」彼は、コリント人への手紙 第一 15 章 3-4 節でさらに語っています – 「³私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、⁴また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、」

そしてコリント人への手紙 第二 5 章 19 節 – 「¹⁹すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。」神の計画は、イエス・キリストをこの世に送り、私たちの罪のために十字架上的犠牲の死を通して罪人を救い、そして死者の中から復活させることでした。さらに二つの聖句を紹介させてください。ヨハネの福音書 10 章 30 節で、イエスは「わたしと父とは一つです」と言われました。これに対して、ユダヤ人の指導者たちは 33 節で「あなたは人間でありながら、自分を神とするからです」と言いました。彼らは、イエスが自分を神であると主張していることを理解していたのです。聖書全体を読むと、イエスは神であり、神が人となった存在であること—これが受肉の教義です。そして、聖霊も神であり、父、子、聖霊という三位一体が存在することがわかります。これらは標準的なキリスト教神学の基本的な原理です：三位一体、イエス・キリストの神性、私たちの罪のための贖いの犠牲、そして死からの復活により、罪と死に対する勝利を示したことです。正統的な神学には他にも多くの側面がありますが、これらの考えを出発点としてご紹介します。

この正統派キリスト教神学の枠組みの中には、多くの教派があります。いくつかについては後ほど説明します。しかし、今この数分間で、画面上の私の枠の赤い線の外にあるいくつかのグループについて説明したいと思います。これらは、私たちが異端と呼ぶグループであり、キリストとキリスト教的な生活について誤った教えを広めるものです。キリスト教の初期の世紀においては、いくつかの異端が存在し、キリスト教の重要な教えや、神が人となったという受肉の教義のようなイエス・キリストに関する重要な真理すら否定していました。

基本的な正統派キリスト教神学

三位一体（父、子、聖霊）

イエス・キリストの神性 / 受肉の教義 /

私たちの罪のための贖いの犠牲 / キリストの復活

異端

グノーシス主義

モダリズム主義

など

アリウス主義

私は、西暦 4 世紀に正統的なキリスト教に非常に深刻な挑戦をもたらした一つのグループについて言及したいと思います。これは、アリウスというキリスト教の司祭によって教えられたアリウス主義という異端でした。彼はキリストの完全な神性を信じておらず、彼の考えはますます人気を博していました。この挑戦により、西暦 325 年にニケア公会議として知られる、司教たちの教会全体の会議が召集されることとなりました。この公会議により、今日私たちがニケア信条と呼ぶものが形成されました。この信条は、私たちが父・子・聖霊という三つの人格として永遠に存在する唯一の神を信じることを明確に示しています。この信条は三位一体の教義の最も基本的な表現として残り、中世、プロテスタント宗教改革、そして現代に至るまで、何世代にもわたるキリスト教神学者たちによって何度も承認され続けています。¹

¹ ニカイア信条：

我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず

自らをキリスト教徒と名乗るあらゆるグループであっても、私が正統派キリスト教神学として述べた基本的な教義を肯定しない場合、私たちはそれらのグループを真のキリスト教徒とは見なしません。現代において、私たちがキリスト教徒とは考えない三つのグループを挙げます。それは、エホバの証人、モルモン教会、そして統一教会です。エホバの証人は三位一体とキリストの完全な神性を否定するため、半アリウス派と表現できます。モルモン教会と統一教会は非常に独特な神学を持っています。今日、これら三つのグループを挙げたのは、多くの非キリスト教徒や一部のキリスト教徒ですら、これら三つのグループが正統派キリスト教の大多数の教派によってキリスト教徒とは見なされていないことを知らないからです。日本の一部のプロテスタントや福音派の教会では、公開されている資料やウェブサイトの下部に、自分たちがあの3つの団体とは一切関係がないという小さな表記があることに気づいたかもしれません。これは非常に重要な区別です。

基本的な正統派キリスト教神学

三位一体（父、子、聖霊）

イエス・キリストの神性 / 受肉の教義 /

私たちの罪のための贖いの犠牲 / キリストの復活

(プロテスタント教派：ルーテル教会、改革派教会、
イングランド国教会（英国国教会）、長老派教会、メソジスト教会、
バプテスト教会、メノナイト教会、ブレザレン教会、その他多数)

現代異端

エホバの証人
モルモン教会
統一教会
など

さて、今日のメッセージの核心に移りましょう。それは、キリスト教の異なる宗派についてです。バプテスト、長老派、メソジスト、ルター派、聖公会、メノナイトなど、様々です。私は、基本的な正統派キリスト教神学を詳細に説明するのに多くの時間を費やしました。なぜなら、実際のところ、キリスト教会内で私たちが目にするあらゆる分裂があるにもかかわらず、実際には私たちが同意する多くの重要な問題が存在しているからです。確かに、ある宗派が他の宗派に対して批判的な意見を述べるのを耳にする一方で、宗派を超えた友情や協力の話も聞きます。

今日のメッセージの残りの部分では、少し歴史の授業をしたいと思います。すなわち、私の見る限りの教派的風景の歴史的な物語です。私は歴史が好きで、聖書も好きで、覚えている限りずっと両方を学んできました。もちろん、私の物語はキリスト教時代の初期の世紀から始める必要があります。その当時、ローマ帝国は衰退期にあり、西半分と東半分に分かれており、東半分の首都はコンスタンティノーブルに置かれていました。ローマ帝国

私は唯一の主イエス＝キリストを信ず。主はよろず世の先に、父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また我らを救わんがために、天よりくだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受け、人性をとり、我らのためにポンテオ＝ピラトのとき、十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座したまえり。また栄光をもって再びきたり、生ける人と死ねる人をさばきたまわん。その国は終わることなし

我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまひし主なり。

我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命をのぞむ。

アーメン — 『日本聖公会祈祷書(1959年版)』より

の西半分と西ヨーロッパの残りの地域の教会は最終的にローマ・カトリック教会に組み込まれ、ローマの司教が教会の指導者とみなされ、それ以来、ローマの司教は「教皇」として知られるようになりました。帝国の東部では、その地域の教会は東方正教会の諸教会として知られるようになりました：ギリシャ正教会、セルビア正教会、ルーマニア正教会、ロシア正教会などです。

中世の歴史が進むにつれて、聖書が明確に述べているキリスト教生活において信じるべきことや行うべきことを超えた特定の教義や慣習が発展しました。多くの教義は十分な聖書的裏付けがないまま発展し、後にプロテスタントによって否定されました。一方で、これらの教会はさまざまな宗教的慣習を発展させ、それが人々に大きな負担となり、義のための行い、または救いのための行いという体系となりました。中世後期になると、一部のキリスト教神学者たちは、これらの必須慣習すべてに対して執筆を始めました。イギリスのジョン・ウィクリフやボヘミアのヤン・フスがその例です。そして16世紀、マルティン・ルターという修道士が、神のご加護を得ようと精一杯宗教的な実践に励みましたが、何度も失敗を経験しました。その後、彼の師の一人が『神の恵みを黙想しなさい』と助言しました。そしてルターは彼の人生を変える一節に出会いました。それはローマ人への手紙1章17節です。「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」神に受け入れられる義は、厳格な宗教的实践からではなく、単に信仰によって得られるのです。実際、私たちの人生は信仰によって生きるべきなのです。この真理が、プロテスタント宗教改革の火種となり、やがてヨーロッパ中の多くのクリスチャンや神学者がこの運動を支持することとなりました。

今日のメッセージの冒頭近くでお伝えしたように、私の主な論点は、重要であるにもかかわらず無視されてきた聖書の原則が再発見され、再び強調されることによって、新しい宗派が誕生することがある、ということです。この信仰のみによる救いの原則の再発見と再強調は、ウィクリフやフス、ルターによって説かれ、プロテスタント改革を生み出しました。プロテスタント運動が進むにつれて、ドイツ北部やスカンディナヴィア諸国の多くはルター派の神学的アプローチを採用し、ローマ・カトリック教会から離れました。

スイスでは、チューリッヒのウルリッヒ・ツヴィングリやジュネーブのジャン・カルヴァンやウィリアム・ファレルなどによって率いられた並行する運動がありました。これらの教会は改革派教会として知られるようになり、その神学はオランダでも重視されました。ルター派の教会はローマの神学から大きく離れる一方で、中世の伝統的な典礼礼拝のいくつかの特色は残しました。一方、改革派教会はこれらの典礼的慣習から劇的に離れ、聖書全体を通じた力強い説教を重視しました。ジャン・カルヴァンは聖書全書を通して説教することで知られており、これは今日でも私たちのような多くの福音派教会によって受け継がれている方法です。

前にも述べたように、中世において、ローマ・カトリック教会は聖書に明確に示されていない多数の教義や慣習を発展させました。プロテスタントの宗教改革者たちは、聖書から裏付けることのできないすべてのものを否定しました。そして、改革者たちが否定した問題の多い事項は非常に多くありました。多いです。その中でも最も問題となった事柄の一つは、聖餐式（コミュニオン）の扱い方に関するものでした。これは複雑なテーマであり、今日は詳しく議論する時間はありませんが、もしカトリック教会とプロテスタント教会の聖餐式に関する見解をもっと知りたい場合は、昨年3月に行った説教をご覧になると良いでしょう。それは「大阪インターナショナル教会のアイデンティティ」というシリーズの第3回で、キリスト教会の二大儀式である洗礼と聖餐式について取り上げた内容です。

キリスト教会の二つの最も重要な儀式において、異なるキリスト教グループの間で意見の相違や分裂があるのは悲しいことです。聖餐は私たちを一つにするものであるべきですが、残念ながら、多くの場合、教派を互いに分けることとなります。同様に、洗礼の問題もあります。ある教派では、キリスト教信仰を告白した人に限って幼児を受けさせますが、他の教派ではキリスト教信者の乳児にも洗礼を施します。新約聖書には幼児の洗礼の明確な例はありません。しかし、西暦2世紀の終わりまでには、多くの教会で幼児に洗礼を施すことが行われ、16世紀までほとんどの教会で標準的な慣行となりました。

幼児を洗礼することに正当性はあるのでしょうか？さて、コロサイ人への手紙2章11～12節は非常に興味深いものです。そこでは、使徒パウロが割礼と洗礼の間に類似点を見出しています。旧約聖書における割礼は、神とイスラエルの民との間に結ばれた契約のしるしとして与えられました。彼らは生後8日目の乳児の息子に割礼を行いました。もし割礼と洗礼の間に類似点があるとすれば、私たちが新しい契約の時代に生きている現在、洗礼はこの新しい契約のしるしと見なされ、キリスト教の共同体における親が自分達の乳児に洗礼を施すことも正当と考えられるのではないのでしょうか？あなたはこのような考えに賛成するかもしれませんし、しないかもしれません。しかし、幼児洗礼を行うこれらの宗派から来る人々にとって、それは彼らの考え方の一部です。以前に私が言ったことを覚えていますか、宗派は私には異なる価値観や異なる心の枠組みを持つ異文化のように見えますか？幼児洗礼を行う教会には、それを行う理由があり、聖書をそのように解釈する方法があるため、これが正当な習慣であると信じています。これらの人々は聖書を信じるクリスチャンです。私たちはこの問題で彼らと意見が合わないかもしれませんが、彼らは私たちの兄弟姉妹であり、私はそれを受け入れたいと願っています。

宗派の歴史的概観に戻りたいと思います。16世紀のプロテスタント宗教改革には二つの流れがあることを説明したいと思います。一つは「マジェステリアル宗教改革」と呼ばれます。これは、都市、地域、国家の政治的指導者である治安判事（マジェストレイト）が改革を受け入れ、その場所でキリスト教の多数派の表現としたため、このように呼ばれています。こうした教会には、ルター派教会、改革派教会、英国国教会、および後の世紀にこれらの教会から派生した長老派教会やメソジスト教会が含まれます。これらの教会はいずれも幼児洗礼の慣習を続けました。

宗教改革のもう一つの潮流は「急進的改革（Radical Reformation）」と呼ばれ、国家の統制に抵抗し、彼ら自身が正しいと判断した聖書の教えに従いたいと考えました。これらの急進的改革者たちは、信仰を自ら告白する人だけが洗礼を受けるべきだという「信者の洗礼（Believers Baptism）」を採用する傾向がありました。このようなグループには、スイス・ブレザレンやメノナイトが含まれます。これらのグループは、自分たちの良心に従って聖書に従うことに非常に熱心であったため、しばしばプロテスタントもカトリックも含む国教会と衝突し、迫害を受けることもありました。実際、一部の急進的改革者たちは非常に過激で、その熱意のあまり、聖書の基準を健康的でない方法で超えてしまうこともありました。しかし、メノナイトのようにより冷静なグループにとっては、彼らの情熱には多くの称賛すべき点があり、聖書やキリスト教生活に対する多くの彼らのアプローチは、今日の福音派教会にも反映されています。彼らは教会生活における国家の支配を避けたため、多くの教会は独立した会衆として組織され、教会員が教会の運営を管理する形をとりました。このような体制には長所と短所がありますが、重要な長所の一つは、各教会員が自分の霊的生活が聖書の教えや聖霊の導きと一致しているかどうかを責任を持って確認することを求められる点です。このキリスト教の流れにある多くの教会は会衆制の教会運営を行っており、ヨーロッパ、アメリカ、そして OIC での私たちの教会運営の形にも見られます。

私の物語の舞台をイギリスに移しましょう。スコットランド教会は長老制の教会行政とスイスの宗教改革の改革派神学を受け入れました。長老派の教会は、各地の会衆が教会生活にある程度の自治権を持つ一方で、各教会が互いに責任を持つ体系があり、正統な教義と慣行から逸脱しないように管理されるという、称賛に値する教会行政の形態を持っています。

一方、イングランドにおける教会の歴史はかなり独特です。イングランド国教会はローマ・カトリック教会から分離しましたが、それはヨーロッパ大陸で起こったこととは大きく異なる方法で行われました。イングランド国教会はプロテスタントとカトリックの間の“中道”を目指しました。礼拝ではカトリックの儀式のいくつかを保持しつつ、改革派の神学を受け入れたのです。イングランド国教会の中には、カトリック的な慣習を許容できないと考える人々もいました。これらの人々は、イングランド国教会をカトリックの影響から浄化したいと考えたため、ピューリタンと呼ばれるようになりましたが、彼らの試みはあまり成功しませんでした。ピューリタンには多くの賞賛すべき点があります。彼らは聖書、特にヘブライ語の聖書の真面目な研究者であり、聖霊の働きが私たちの生活に及ぼす影響について深い神学的理解を持っていました。ピューリタンは 17 世紀のイングランドの文化や政治に深い影響を与えました。多くのピューリタンはアメリカ植民地に移住し、そこでも大きな影響を与えました。

その一方で、ピューリタンの著作はドイツのフィリップ・ヤーコプ・シュペーナーという人物に影響を与えました。これらの著作に触発され、シュペーナーは、霊的に死んでいると見なしたルター派教会に新たな霊的生命をもたらそうとしました。彼は「敬虔な集まり」と呼ばれる活動を推奨することで、信徒を積極的な聖書研究や奉仕活動に参加させ、

教会生活を活性化させようと思いました。これらの「敬虔な集まり」は、今日私たちが「小グループ聖書研究」と呼ぶものの先駆けであると言えるでしょう。フィリップ・シュペーナーは『敬虔な願い』（*Pia Desideria*）という書物を著し、彼の運動はピエティズムとして知られるようになりました。この運動には私が多くの敬意を抱いており、いずれ皆さんにさらに詳しくお話ししたいと思っています。

ピューリタニズム運動（ピエタリズム）はモラヴィア地方の難民のグループに影響を与え、モラヴィア教会を生み出しました。これは非常に宣教志向の強い教会で、彼らは海外に宣教師を送りました。これはプロテスタントのグループとしても最も初期の例の一つです。

一方、18世紀には、イングランド国教会（アングリカン・チャーチ）の司祭ジョン・ウェスレーが出会ったモラヴィア人から大きな影響を受けました。彼はロンドンのオールダースゲート通りにある礼拝堂で開かれたモラヴィア人の集会の一つで、真に生まれ変わった信仰に転向しました。これは福音主義の歴史において画期的な出来事でした。なぜなら、ジョン・ウェスレーはメソジスト運動として知られる運動の主要な人物であったからです。彼と彼の友人ジョージ・ホウィットフィールドは、イングランド中で福音を宣べ伝えるために神によって大いに用いられた伝道者であり、18世紀および19世紀のイングランドの霊的生活や社会生活に大きな影響を与えました。私はメソジスト教会とその伝道的・社会的な取り組みに深い敬意を抱いています。

19世紀後半、アメリカ中部で、メソジスト派の牧師によって導かれた聖書研究グループが使徒の働きを学んでいました。その中で、彼らは使徒の働きに見られる聖霊のすべての働きは、今日の教会においても行われるべきだと結論づけました。これは、異言で話すことや奇跡的な癒しを含みます。その後間もなく、教会の数名の人々が異言の賜物を受け、この実践は他の地域にも広がりました。特にロサンゼルスで顕著でした。そこでは、1906年に有名なアズサ通りリバイバルが起こり、多くのキリスト教の牧師や信徒が異言で話し始めました。それは、使徒の働き2章で見られる新しいペンテコステのようでした。こうしてペンテコステ派教会が誕生しました。1960年代には、異言で話す実践は教派の垣根を越え、古い教派の中にもこの実践を始める人々が現れました。このようにしてカリスマ運動が生まれました。この運動の名前はギリシャ語の『カリスマ』（*charisma*）に由来し、『恵みとしての賜物』を意味します。これは私たちが霊的賜物と呼ぶものでもあります。コリント人への手紙 第一12章などでこの『カリスマ』という言葉を見かけます。この時期に、カルバリー・チャペル家族教会のようなグループが誕生しました。異言や癒しといったこれらの超自然的な賜物は20世紀に物議を醸し、多くの聖書学者は、いわゆる『しるしの賜物』である異言などが初代教会の一時的な現れであり、新約聖書の書物が完成した後はもはや必要ないことを聖書から示そうと試みました。今日、私たちは完成した聖書を通してキリスト教生活の指針を得ることができます。

今日は、私が見ている教派の状況についての個人的な考察をもって説教を締めくくりたいと思います。私は1960年代、ロサンゼルス南部の郊外で育ちました。そこでは新しい住

宅が次々と建てられ、あらゆる種類の教会が風景に彩りを添えていました。母は、子どもたちをルーテル教会に連れて行きました。それは彼女の教派の背景によるものではなく、その教会が私たちの町で一番のサンデースクールプログラムを持っていたからです。私はルーテル教会で受けた素晴らしい基礎教育に深く感謝しています。後に私がティーンエイジャーの頃、家族はサンディエゴに引っ越し、全く異なる宗派の教会に通うようになりました。ある日、その教会で、一人の女性が、自分の友人について話してくれました。その友人はルター派の教会に属しているため、明らかにクリスチャンではないと彼女は言いました。そんな判断を聞いて私は衝撃を受けました。教会にはさまざまなタイプがあり、重視する点や霊的な深さも異なることは知っています。しかし、他の教会の人々がクリスチャンではないと言われるとは、私には衝撃的でした。

私の双子の兄と私はロサンゼルス大学に進学したとき、ジョン・マッカーサーが牧師を務めるグレース・コミュニティ教会に紹介されました。私たちは彼の説教壇での優れた聖書の教え、聖書の書を節ごとに教える方法に感銘を受けました。彼はしばしば説教する節のギリシャ語の言葉を指摘し、神の御言葉を劇的に明らかにしていました。当時私は若く理想主義的で、もし私たち全員が元のギリシャ語に立ち返ることができれば、宗派の違いを消し去ることができると感じていました。しかし、その後、ギリシャ語を知っている人々でさえ、さまざまな教義について異なる結論に達していることに気づきました。カリスマ派、長老派、バプテストの人々を知っていたのです。そして私は、神が異なる教派から来たこれらのクリスチャンたちを用いていることに気付きました。実際、教会の歴史を読むと、神がマルティン・ルター、ジョン・カルヴァン、ジョン・ウェスレー、ビリー・グラハム、ジョン・マッカーサー、ティム・ケラーなど、さまざまな教派の男性と女性を用いているのが見えます。神は私たちが聖書という御言葉を完全に理解していなくても、なお私たちを通して働かれます。宗派は依然として存在しており、私は自分が目にする宗派の状況と共に生きることを学びました。大部分の人々は、自分が育ったキリスト教の伝統に忠実であり、それには肯定的な面があります。20代半ばの頃、私はキリスト教の分裂に失望することが多かったのですが、今ではその状況を受け入れ、宗派の壁を越えた寛容と協力を求めるようになりました。

今日のメッセージは、キリスト教会の主要で基礎的な教義の説明から始めました。私が言及したすべての教派は、これらの正統的なキリスト教の教義、すなわち神とは誰か、イエスとは誰か、そして救いの道を信じています。私たちは多くの点で一致しています。他の問題に関して意見が異なるとしても、互いに兄弟姉妹として受け入れ合いましょう。

締めくくりとしてエペソ 4 章 11-13 節を読ませてください。「¹¹こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。¹²それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、¹³ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」